

松 山 大 学 論 集
第 33 卷 第 4 号 抜 刷
2 0 2 1 年 10 月 発 行

稲生晴学長と松山商科大学の歴史（上）

川 東 暉 弘

稲生晴学長と松山商科大学の歴史（上）

川 東 埴 弘

目 次

はじめに

1) 1980年1月～3月

2) 1980年度

3) 1981年度

4) 1982年度 (以上, 本号)

5) 1983年度 (以下, 次号)

6) 1984年度

7) 1985年度

おわりに

は じ め に

伊藤恒夫学長（在任：1977年1月1日～1979年12月31日）が、1979（昭和54）年12月末でその任期が満了するので、11月20日、松山商科大学学長選考規程にもとづき学長選挙が行なわれ、経済学部教授で理事の稲生晴（54歳）が当選し、第7代学長に決まり、1980年1月1日から就任することになった。稲生晴は本校出身者で増岡喜義につぐ2人目の学長であった。

稲生晴教授の経歴は、退職記念号によれば、次の通りである。

1925（大正14）年3月愛媛県西宇和郡四ツ浜村大字田部に生まれる。1942（昭和17）年12月県立八幡浜商業学校卒業。1945年9月松山経済専門学校を卒業。1949年3月九州大学法文学部経済学科卒業。1951年3月九州大学大学院特別研究生前期修了。同年4月同大学院研究奨学生第3年入学、1952年3月同大学院修了。同年4月九州大学経済学部助手。1953年4月松山商科大学講師、

1960年4月松山商科大学助教授。1961年11月経済研究所次長（～1965年12月）、1965年4月同教授。1967年6月経済研究所所長（～1969年6月）。1969年5月学校法人松山商科大学理事（～1979年12月）。1980年1月松山商科大学学長兼松山商科大学短期大学部学長就任（～1985年12月）となっている¹⁾。

この略歴はあまりに簡略過ぎ、また入学年次も記されておらず、不十分なので、現時点で収集した資料や聞き取り等により、補足しておこう。

稲生先生は旧姓梶原である。1943年4月松山高等商業学校（校長は田中忠夫）に入学し（1944年4月から経済専門学校に校名変更）、1945年9月松山経済専門学校を卒業した。高商・経専時代は戦争末期で、先生は勉強どころでなく、勤労奉仕と戦争に明けくれた。2年生の9月には長崎県の三菱造船所に勤労働員され、その後徴兵され、高知県で本土防衛に当たり、敗戦を迎えた。また、この時期に梶原家から八幡浜の稲生家（大地主、多額納税議員の家）に養子に入った。敗戦後の1946年4月九州大学法文学部経済学科に入学し、無知から科学に目覚め、マルクス経済学の岡橋保ゼミに入り、1949年3月卒業した。同年4月大学院に進学し、引き続き岡橋ゼミで研究し、1952年4月同大学助手となり、1953年4月松山商科大学短期大学部講師に採用された。なぜ、九大に残らず、松山商科大学（伊藤秀夫初代学長時代）に就職したのかについては、両親が愛媛に連れ戻したとのことである。

稲生先生の九大時代の学生・大学院生活はいかなるものであったのか。『松山商大新聞』（第53号、1953年11月20日）に、稲生先生へのインタビュー記事があるので紹介しよう。

「九大生活は従来 of 熱狂的な、無知な、そしてファッショ的に硬化した頭脳を自分の力で変革して行くという方針の気がみなぎり、過去の一切の不愉快な思い出を一挙にくつがえす程に生き生きとした学生生活であり、

1) 稲生晴退職記念号『松山大学論集』第6巻第3号、1994年8月より。

無知から初めて科学に目覚めた時の歓喜は決して忘れない思い出であるといわれる当りは向学心に燃える若き学究そのものの姿である。又在学中は岡橋保教授のゼミ（貨幣金融論）に参加し、研究生の間も同教授の指導を受け、現在担当の金融銀行論を専攻したものである。トウークの『通貨更生の研究』、セフラートンの『通貨調節論』等をテキストとして報告し、研究室に入り、一九世紀前半の英国における地金論争、通貨論争を研究課題にしたが、常に心は資本論を離れず、資本論研究生と多くの時間を費やして討論し今後もこれを中心として、行きてはもどり、もどりては行くという研究を続ける積もりであるという。そして本学の山下文庫という稀有で抱負な文献を利用して近代的信用理論の発祥時代の理論的諸事業を綿密に研究していくのが氏のこれからの研究課題のようである²⁾

このように、稲生先生は九州大学に入り、無知から科学に目覚め、向学心に燃え勉学に励んだようだ。ゼミはマルクス経済学の信用論の大家・岡橋保教授の下で貨幣金融論を学んだ。大学院も同教授のもとで地金論争、通貨論争を研究した。また資本論研究会に参加し、多くの時間を費やし討論し、マルクス経済学を志向するようになったことがわかる。

当時の九州大学経済学部には向坂逸郎教授（労農派マルクス主義）がいて、その影響は絶大であり、稲生先生は、岡橋門下生であると共に、向坂門下生にもなった。向坂逸郎抜きには稲生先生の人生は語れないので、少し向坂逸郎についても触れておきたい。

向坂逸郎は1897年福岡県に生まれ、第五高等学校時代河上肇の『貧乏物語』を読み経済学を志し、東京帝大に進んだ。1921年卒業後東京大助手となり、翌年九州帝大に就職し、2年間ドイツに留学し、帰国後助教授をへて、1926年から教授となっていたが、1928年三・一五事件の余波を受けて九大を辞職

2) 『松山商大新聞』第53号、1953年11月20日。

させられた。その後、上京して、改造社の『マルクス・エンゲルス全集』全31巻の編集に携わった。その間、『労農』の同人となり、労農派の論客として、日本資本主義論争で活躍した。だが、1937年の人民戦線事件で検挙され、2年半監獄生活をおくり、出獄後は翻訳と百姓生活で終戦を迎えた。戦後、直ちに九州大学教授に復帰し、マルクス経済学を研究し、また資本論研究会を組織し、若手の学究を育てた。政治面では社会党左派を支援し、1950年には社会主義勢力の結集をめざす社会主義協会を結成し、その代表となった。また、1960年の三池炭坑争議を指導し、学習会活動、労働者教育に力をいれ、清潔で暖かい性格により、多くの人たちに人格的影響を与えた³⁾

稲生先生は学生時代、この向坂逸郎から強い影響を受け、向坂が組織した資本論研究会に参加し、資本論を学び、向坂門下生となった。

そして、九大の大学院を修了し、同大学助手を1年間つとめたが、両親の求めに応じ、帰郷し、1953年4月松山商科大学短期大学部講師として赴任した。この時28歳であった。4年制の商科大学所属ではなく、前年伊藤秀夫学長・理事長のもとで設立されたばかりの短期大学部（商科2部）に配属された。担当科目は銀行および金融論等であった（なお、この時、神森智先生も同時に赴任し、やはり短大配属であった）。

この短大時代に、稲生先生は論文「銀行主義の研究－フラートンの貨幣信用理論」（1, 2）を『松山商大論集』第4巻3・4号、1953年12月、同第5巻3・4号、1954年12月に発表している。また、向坂逸郎編の『マルクス・エンゲルス選集』（新潮社）の第14巻『資本論解説』（1956年12月）の第7篇「諸収入とその諸源泉」の第48～52章を執筆し、また、第15巻『剰余価値学説史』（1957年4月）の第3巻第5章「シェルビュリエ」を執筆しており、向坂門下生の学究者の一員であったことがわかる⁴⁾

稲生先生は短大所属だが、松山商科大学の教員も兼務し、講義も行なってい

3) 松尾尊兌『国史大辞典』（吉川弘文館）より。

4) 前掲、稲生晴退職記念号より。

た。大学では外書講読も担当していた。稲生先生の外書講読を受講した岩田裕氏（1958年4月入学，1962年3月卒業，太田ゼミ，1965年4月本学助手となり，講師，助教授，1976年3月退職し，高知大学に転任。高知大学名誉教授）の「稲生先生の思い出」（2021年6月）を紹介しよう。

「私は外国書購読の授業（英語，独語）が，どの科目よりも気に入っていましたので，必須単位以上に多くを履修しました。2回生の時，稲生先生の授業（英語）を，3回生の時に安井先生の授業（英語），4回生の時に八木先生の授業（独語）を履修しました。稲生先生はディヴィッド・リカードの『経済学および課税の原理』をテキストとして使っておりました。確か，学生が学籍簿順に声を出して読み上げ，その後で翻訳し，先生が訂正するというような授業だったと思っています。授業は1時間半の長丁場でしたが，1～2ページの進行というゆっくりしたペースでした。したがって，15回で30ページ程度しか進めませんでした。私は現代経済学に対する関心程には，古典派経済学への関心が薄く（入江奨先生の学説史の授業は受けて単位を取得しましたが），ディヴィッド・リカード以外にはアダム・スミスの『国富論』しか学習しませんでした。しかし，皮肉なことに，大学院に進んでからは，学説史の講義を受けたときは，結構役立って，良かった，良かったと一人合点した次第です⁵⁾

さて，稲生先生が松山商科大学に赴任する2年前の1951年3月，入江奨先生（経済学史）が広島大学助手から本学に赴任していた。入江先生は大変教育熱心で，赴任早々学生の自主的研究活動である経済学研究会を組織し，ヒックスやケインズを読み，指導した。さらに，入江先生は1953年3月10日，経済学研究会の一翼として資本論研究会（入江ゼミが中心）も組織し活動をはじめ

5) 岩田裕氏よりの手紙（2021年6月11日）

た。入江ゼミの星川順一（1952年入学，1954年入江ゼミ，大阪市立大学名誉教授）は，毎週入江先生の宅に行き，夜を徹して議論したと回顧している⁶⁾

この入江先生指導の資本論研究会には，稲生先生も時期は不明であるが，参加していたようだ。入江ゼミの三津山寛功（1954年入学，1956年入江ゼミ）は「資本論の講読会を，入江先生，稲生先生，望月先生，さらには神森智先生などと共にやった思い出もあります」⁷⁾と述べているからである。

稲生先生は，1960年4月，短大から松山商科大学商経学部に移り，助教授に昇格した。1962年4月経済学部，経営学部開設にともない，経済学部に所属し，1964年から学部の金融論を担当するようになった（山下宇一の後任）。この助教授時代には，研究論文として『松山商大論集』に「現代通貨価値論－何が価値の尺度であるか－」「信用制度下のインフレーションの一問題」「不換銀行券および預金貨幣の本質」等を発表している。そして，1965年4月から教授となった。

教授時代の稲生先生について，1965年4月本学経済学部に赴任した岩田裕氏の「稲生先生の思い出」を紹介しよう。

「松山商大の教員時代の思い出を一つ述べることにしましょう。稲生先生といえば，労働組合（運動）や、『資本論』に造詣が深いというのが，もっぱらの評判でした。といいますのは，九州大・学生時代に向坂先生の弟子的存在で，私が商大の学生時代に『資本論』を読む際に，稲生先生の解説本が大変役立ったという印象が残っております。その先生から，松山商大に就職した2年目に『岩田君，高知県の中村市へ教職員組合がやっている資本論学習会に講師として行ってくれないか』との要請を受けました。なぜ，高知大学の先生に頼まないのかとの思いが募りましたが，『商大に

6) 拙稿「評伝 入江先生の人と学問 その1」『松山大学論集』第32巻第2号，2020年6月，104，119頁。同「その2」第32巻第3号，2020年8月，210，211頁。

7) 三津山寛功「私の世界」入江ゼミ同窓会機関誌『つくし』第2号，1969年3月10日。

は君しかいないから頼みます』との懇願に近い勧誘の言葉に負けて、交通事情の厳しい高知県中村市に出かけること（国鉄の宇和島駅経由で中村市へ：朝早く国鉄松山駅を出発し、10数時間で中村市着）になりました。教職員組合の方々から、大歓迎を受けて、この大役を果たせたことは、今も懐かしい思い出として残っております⁸⁾

このように、稲生先生といえは、労働者の味方、資本論の研究者との評判が定着していたようである。

1968年6月、稲生先生は『松山商大新聞』編集子の求めに応じ、「70年安保をめぐる経済動向 矛盾を深める独占資本」を執筆している。その大要は次の通りで、マルクス経済学者としての稲生先生の平和主義、反独占、生活擁護、勤労者の立場をうかがわせる主張である。

「かの安保・三池の闘いは1960年前後の高度成長を舞台とし、岸内閣は日本独占資本の自立の上に立って、『日米新時代』をうたった。安保・三池は民主主義と生活擁護のために国民大衆を反独占に立ち上がらせた。

あの時に比べ、70年安保の情勢はどうか？ 1965年不況を転機に過剰な生産力が累積され、利潤率が低下している。利潤率の低下をカバーすべく利潤量の増加がはかられているが、それは財政支出の増大、信用の膨張による支えを必要とし、それが今日の体制的インフレを招いている。インフレは輸出増進にとってマイナスであり、それを解決するため、独占企業は合理化を必要とする。実際、生産量は増大するが、雇用量は停滞し、労働強化、労働密度が増大した。

この様な合理化路線のもとで、資本側は労資協調、企業防衛のために組合工作をすすめた。労働戦線に流動化が始まり、総評とともに歩んでいた

8) 前掲、岩田裕氏よりの手紙。

中立労連のうち電機労連が離れた。ついで鉄鋼労連が離れた。今、70年安保闘争を前にして、我国の労働戦線は、60年安保の時と比べて決定的に遅れている。

次に最近の大型企業合併、旧王子系3社、三菱重工、八幡と富士の合併の動きは、金融独占体制の露骨な強化である。これらによって企業のスクラップ化が進行し、中小企業は倒産する。

60年安保と比較して、世界資本主義の方をみると、ドル危機に象徴されるアメリカ経済の地位の低下である。アメリカはドル防衛のために資金流出制限、輸入制限、輸出拡大に全力を上げる。これは、アメリカからの資金借り入れに依存し、輸出入の3割をアメリカ経済に依存している日本にとって大きな打撃となろう。

資本自由化の本格的実施とドル危機によって、帝国主義間の経済的対立は激化する。今日の帝国主義各国の死活の手段は資本進出による直接的な市場争奪戦となる。

このような情勢の中で、政府独占の体制的合理化路線が推進され、個々の企業から日本経済全体への合理化をもたらす。農産物の自由化、米の統制撤廃、中小企業の倒産、官公庁の合理化等によって、農民、中小零細業、労働者の窮乏化が進展する。また、労働者の体制内化、組合の右傾化が進展する。

すでに開始されている政府独占と労働者階級を中心とする国民大衆との安保闘争は20世紀後半の日本の進路に決定的な歴史的意義をもつものである」⁹⁾

1969年1月1日、増岡義喜学長の後を受けて、八木亀太郎教授（経営学部）が第4代松山商科大学学長兼理事長に就任した。その八木理事長の下で、稲生

9) 『松山商大新聞』第155号、1968年6月30日。

先生は5月、新理事に抜擢された（太田明二の後任、他の理事は、元木淳、神森智）。この時44歳であった。推測するに、稲生先生はマルクス経済学者として学内で認識されていたが、本学出身で愛校心があり、責任感が強く、また人望があったためと考えられる。また、すでに同期の神森智教授が理事に就任しており、その関係もあったものと推測される。というのは、入江奨、稲生晴、神森智は、ジュピター会のメンバーで商大の三羽鳥と言われた同志であった。

稲生先生は八木理事長を補佐し、その後の太田明二、伊藤恒夫理事長時代も、他の理事が次々と交替する中で（神森理事は3年で退任）、一貫して理事職を10年余にわたって務め、本学園の拡大・発展策を推進した。稲生理事（教学担当）が積極的に関わったものは次の如くである。

- ①教学面では、1972年4月大学院経済学研究科修士課程開設、1974年4月同博士課程開設、同年人文学部開設、1979年4月経営学研究科修士課程開設等。
- ②定員面では、1966年4月以来経済学部、経営学部の1学年の定員は各250名であったが、1976年4月各300名に、1979年4月各350名に増やし、また、人文学部の定員は1974年4月英語英米文学科、社会学科各50名であったが、1979年4月人英80名、人社100名に増やした。
- ③建物・施設の建設面では、1969年9月1号館、1974年1月4号館、1975年3月有師寮、1976年3月50年記念館（図書館）、1976年12月松田池購入（約1万坪）、1977年10月御幸グラウンド竣工、1979年7月旧本館解体し、本館着工等¹⁰⁾

このように、稲生理事は、1970年代における本学園の積極的な拡大・発展の中心のど真ん中に居続けたといえよう。

10) 『松山商科大学六十年史（資料編）』より。

同じ九州大学大学院出身で稲生先生の後輩にあたり、先生を親しくそばでみてきた高橋久弥経済学部教授によると、「(先生の) 拡張主義的施策に対し批判がなかったわけではないが、現にこの時期に推進された諸々の施策によって、今日の大学の制度的基礎が形成された」と評価している。そして、マルクス主義と管理者・経営者との関係について、「(先生は) 実用を基本にした教育実践に重きをおくべきであるとの考えをもっておられ、…実際先生はマルクス主義者ではあるが、イデオロギッシュで頑迷な人というよりはむしろ現実的であり、現状の推移を見据えながら、現実的対応を考えてこられた人のように思う」と述べている¹¹⁾

高橋教授の指摘はおおよそ正鵠を得ていると思うが、私の考えもいれて補足しておきたい。稲生先生は、その思想・理念は岡橋・向坂教授の門下生でマルクス主義(社会主義協会、社会党左派)であったが、思想・信条と大学経営は別であり、大学は企業の利潤追求の営利団体とは異なり、学問研究を目的とする学園協同体であり、両立すると考えていたものと思う。また、稲生先生は時代の動き・要請に対し、現実的に対応する能力・柔軟性を有し、さらに、協同体の構成員の意見を聞きながら運営せんとする民主的考えを有していたので、理事になったのだらうと思う。

稲生先生は理事になるや、1960年末～70年代の日本経済の大国化、大学の大衆化、大学進学者・進学率の増大といった時代の流れに添い、時代の要請に応え、本学園発展のために、規模拡大(学部増設、マスプロ化、建物建設、松田池購入等)を推進した。そして、その費用を賄うために学生に負担を強いる授業料値上げも行なった。学生が反発し、1971年1月と1974年6月の2度にわたり本学園で授業料値上げ反対のストが起きることもあったが、柔軟に対応しながら、学園を発展させるために邁進した。

要するに、稲生先生は思想・信条ならびに学問の方法論はマルクス主義であ

11) 高橋久弥「足跡をたどりながら先生を想う」『松山大学論集』第6巻第3号、1994年8月。

るが、経営は別で、学園協同体の発展という方針の下、時代の要請にこたえ、「現実的対応」して、ときには「拡張主義施策」をとり、学内から批判、反対もあったが、推進した有能な理事者であったといえよう。

理事時代の稲生先生の研究業績をみると、「価値形態と世界貨幣」『松山商科大学創立50周年記念論文集』1973年12月、「現状分析における価値、価格、貨幣概念」『松山商科大学新制30周年 人間と社会の諸問題』1979年12月、で少ない。10年余も理事職に専念しすぎたため、研究面では忸怩たる思いがあったと推察される。しかし、教育活動面では、労働者教育に携わり、社会主義協会の機関誌「社会主義」に時事問題について投稿し、マルクス主義の思想・信条・学問的方法論を堅持している。

そして、伊藤恒夫学長の後を受けて、1980年1月1日第7代松山商科大学学長兼理事長に就任した。

稲生先生が学長・理事長職を務めた1980年代の前半は、第2次石油危機後の世界的同時不況（1980～1982年）があり、1983年からは日本経済の躍進・経済大国化が始まる時期である。

本稿は、「伊藤恒夫学長と松山商科大学の歴史」¹²⁾に続き、稲生晴学長時代（在任：1980年1月1日～1985年12月31日）の6年間にわたる本学の歴史ならびに稲生学長・理事長の功績について考察するものである。

1) 1980年1月～3月

1980年1月1日、稲生晴教授が第7代松山商科大学学長兼学校法人松山商科大学理事長に就任した。同時に松山商科大学短期大学部学長も兼務した。

この時の稲生学長の就任の辞は未見であるが、後、『温山会報』第23号（1980年11月）に「就任の挨拶」が載せられている。それは次の通りである。

12) 拙稿「伊藤恒夫学長と松山商科大学の歴史」『松山大学論集』第33巻第3号、2021年8月。

「伊藤恒夫先生の後を継いで今年一月から戦後第七代目の学長に就任しました。任期は五十七年末までの三年間であります。経専を二十年九月に卒業し、九州大学経済学部で学び、二十八年四月母校教員になりました。専攻は貨幣・金融論であります。星野通先生からバトン・タッチをうけて二十三年間ラグビー部長をやり、四十四年から学校法人の理事を兼務して約十年間学園の運営に関与してきました。誠に至らぬ者であります但母校の充実発展を心から希求し最善をつくす覚悟であります。温山会の皆さんの暖かいご支援、ご鞭撻を切にお願い申し上げます。

新制大学三十周年を経た今日、日本の大学が人材養成の面で重大な問題をかかえていることはご存知の通りであります。日本の大学樹林の大勢は其中で五十七年の樹令を誇る本学の樹勢をも例外とするものではありません。末期的混迷の社会現象のなかで大学は何をしているのか、自ら社会・職場の現状において自らの人生を問われているのであります。

私は今深く歴史に学び、正しく現状を把握し、果敢に歴史を作る意志と力を発揮しなければならぬと思っています。実業界においても、学問の領域においても人間は往々にして自分の当面する課題の複雑さと困難さを実感し強調することはできても他方先人の時代と活動を比較的単純容易なものとする傾向があります。人は戦前の松山高商はいい学校であったと評します。しかし最初から高い社会的評価を受けることができたのでしょうか。さらにまた当時の時代環境のおかげで簡単に楽々とよくなりえたのでしょうか。私は断じてそうでないと思います。わがくにの旧制専門学校の歴史をみると大正初年から昭和初年にかけてその数は急増しています。大正十二年創立の本学はいわば当時の新設校であり後発校でありました。それが急増した同系統の学校群の中で競り勝ち天下に松山高商の名を上げた根本的な動力は何か。私は先師、先人の格別の努力と業績に深く思いを致さざるをえません。正に人は石垣、人は城であります。

時移り、世もひと大きく変わりました。大学の大衆化という大勢の中

で、本学の規模も学生数約四五〇〇名、教職員約二〇〇名を数えるに至っています。このような学園の質量の変化の現実にとって本学の伝統的特色を継受するとともにさらに新たに魅力ある学園、個性をもった学園づくりに全学の力を結集すべきときであると思います。教職員各自が自らの実践を通じて抱いている問題意識をどのように統一し、どのように改善のエネルギーにするか、これが私に与えられた重要課題であります。

幸いにして本学の基本的特質は生き続け一貫しています。第一に本学は教員を中心とする自治運営の学園共同体であり、第二には教職員と学生との親密な人間関係を保っています。私は本学の教職員がその時間と空間において学生と接触し、交流する量が大きいことを多としています。卒業生は学園の最大の資産であります。元気な魅力ある人材を一人でも多く輩出し、さらに新たに学園の存在価値を高め、本学の樹勢を強化することを念願して止みません¹⁾

この挨拶から、母校出身で母校愛にみち、本学の歴史、基本的特質（自治経営の学園協同体、家族主義的エートス）を十二分に理解し、本学園を発展させんとする稲生学長の強い意思をみてとることができる。

稲生理事の理事長就任に伴い、理事の補充選挙が行なわれ、1980年1月1日から経済学部の伊達功教授が新しく理事に就任し、稲生理事を補佐することになった²⁾。稲生理事は、経済学部の入江奨教授に頼んだが、断われたとのことである。

稲生学長・理事長就任時の、経済学部長は望月清人（1979年4月1日～1981年3月31日）、経営学部長は岩国守男（1978年4月1日～1980年3月31日）、人文学部長は星野陽（1977年1月1日～1980年10月31日）、大学院経済学研究科長は入江奨（1978年4月1日～1984年3月31日）、経営学研究科長は神

1) 『温山会報』第23号、1980年11月。

2) 『六十年史（資料編）』126～131頁。

森智（1979年4月1日～1981年3月31日）が務めていた。

全学の校務体制は、教務委員長は辻悟一（1979年5月1日～1980年4月30日）、学生委員長は高橋久弥（1977年4月1日～1981年3月31日）、入試委員長は岩橋勝（1979年5月11日～1982年4月30日）、図書館長は元木淳（1976年4月1日～1980年3月31日）、経済経営研究所長は宮崎満（1977年4月1日～1980年3月31日）が務めていた。事務局長は墨岡博（1973年1月1日～1981年3月31日）が続けた。

学校法人面では越智俊夫（1974年3月1日～1980年12月31日）、中川公一郎（1977年12月1日～1986年3月31日）が理事を務め、伊達功（1980年1月1日～1980年12月31日）が新しく理事に就任した³⁾

2月7日、意欲的な稲生学長・理事長は、新しい「学園充実計画委員会」（第3次）を立ち上げ、委員に各学部長（望月清人、岩国守男、星野陽）、短期大学部主事（井出正）、そして各学部から比嘉清松、中原成夫（以上、経済）、三好和夫、三浦正孝（以上、経営）、飛驒知法、横山知玄（以上、人文）、そして理事から伊達功、事務から菅原実が委員となった。以後、「学園充実計画委員会」で取り上げるテーマを選択整理し、大学のビジョンについて審議していった⁴⁾

2月11日、1980年度の経済学部、経営学部の入試が、本学、東京（駿台高等予備校）、京都（京都予備校）、岡山（岡山商科大学）、広島（広島英数学館）、福岡（水城学園）、高松（高松商業高等学校）の7会場で行なわれた。募集人員は経済・経営両学部とも350名（文部省定員と同じ）。志願者は経済が1,842名（前年1,733名）、経営が2,006名（前年2,445名）であった。検定料は1万6,000円（前年度1万5,000円）、合格発表は2月20日。入学目標数は経済・経営とも450名で歩留りを考慮して、経済学部が1,025名、経営学部が832名

3) 『六十年史（資料編）』126～131頁。『学内月報』第28号、1979年4月1日。『学内月報』第29号、1979年5月1日。『学内月報』第30号、1979年6月1日。

4) 『学内月報』第39号、1980年3月1日。『学内月報』第40号、1980年4月1日。

を発表した。

人文学部（英語英米文学科，社会学科）の入試は，2月22日，本学，広島（広島英数学館），福岡（水城学園），高松（高松予備校）の4会場で実施された。募集定員は英語英米80名，社会100名（文部省定員と同じ）。志願者は英語英米が454名（前年398名），社会が1,336名（前年930名）であった。合格発表は2月28日。入学目標数は人文英語英米90名，社会110名で歩留まりを考慮して，英語英米が212名，社会が282名を発表した。

なお，学費は入学金は13万円（前年度と同じ），授業料は20万円（前年度16万円），維持費は5万円（前年度と同じ），施設拡充費は2万円（前年度と同じ），その他が2万4,500円で，合計42万4,500円で，授業料を4万円上げた⁵⁾

2月29日，入江奨経済学研究科長の任期満了による研究科長選挙が行なわれ，入江教授が再任された⁶⁾

稲生学長は3月1日，卒業生に対し，『学園報』第46号に「卒業生におくることば」を載せた。そこで，稲生学長は何にも負けない気力をもって出発してください。前向に努力すれば道はおのずから開けてきます，人生の道程に当たっては常に長期の視点，歴史の法則を知ることが大事です。そして，個人の幸福は他人の幸福なくして実現しない，個人の幸福と社会の幸福は本来一致する，そういう考えで魅力ある社会を建設する人間になってほしいと，述べている⁷⁾

3月13日，「学園充実計画委員会」が「大学のヴィジョンについて」答申した。

3月19日，午前10時より第29回卒業式が体育館にて行なわれ，経済学部391名，経営学部421名，人文学部英語英米文学科50名，同社会学科77名が

5) 松山商科大学『昭和55年度入学試験要項』，『学内月報』第38号，1980年2月1日。『学内月報』第39号，1980年3月1日。岩橋勝「昭和55年度入試実施の概況」『松山商科大学学園報』第46号，1980年3月1日より。

6) 『学内月報』第39号，1980年3月1日。

7) 『学園報』第46号，1980年3月1日。

卒業した。また、経済学研究科修士課程2名が修了した⁸⁾

稲生学長の式辞は次の通りで、卒業生に対し、常に長期的視野をもち、歴史の法則を知ること、内外に様々な政治的経済的不安が激化しているが、その底にあるものは何かを正しく把握すること、現在、軍備増強、徴兵制の復活などが叫ばれているが、平和確立のために努力して欲しい、そしてこの激動の時代を乗り切るために精神を強くし、学ぶことを忘れないで生きて欲しい、などと述べた。

「本日茲にご来賓並びにご父兄のご臨席をえて昭和五十四年度学位記・卒業証書授与式を挙行致しますことは、我々教職員一同のもっとも喜びとすることです。

本日の式に寄せられた関係各位のご祝意にたいしまして厚くお礼申し上げますとともに、卒業生並びにご家族の方々にたいしましては衷心からお祝いを申し上げます。

本日芽出度く卒業される者は、大学院経済学研究科修士課程二名、経済学部経済学科三百九十一名、経営学部経営学科四百二十一名、人文学部英語英米文学科五十名、同社会学科七十七名、総計九百四十一名であります。本学の卒業生の数は既に二万有余名に達していて、社会の各分野で活躍しています。卒業生は学園の生きた成果であり、学園の存在価値を世に示すものでありますが、今や諸君がその陣列に新たに加わることにより、卒業生の努力が一段と伸展することを思うとき誠に心強いものを覚えるのであります。

卒業生諸君、諸君は今まさに大学の門を去らんとして大学生生活で自分のえたものは何か、自分は実社会に出て果して何が出来るのか、と自問して

8) 『学内月報』第40号、1980年4月1日。大学院の修了者は『六十年史(資料編)』161頁。なお、『六十年史(資料編)』141頁は、経済学部400名、経営学部は430名で、それは1979年10月卒業生(前期卒業)を含んだ数字。

若干の無力感と不安感を抱かれていることと推察します。しかし、それは諸君だけの特別の心情ではありません。現在社会で堂々と活躍している諸先輩も卒業にあたっての心境においては諸君となんら変わるところなかったのであります。これはまた文科系であろうと、理工あるいは医歯科系であろうと、みな同じであります。不安のない人生などというものはありません。この節目を通過して、いずれ諸君も諸先輩と同様に実社会でそれぞれ芽を出し枝を伸ばし葉を茂らせ花を咲かせることでしょうか。事実がそれを示しています。それが人間の歴史というものです。諸君が大学を出たことも、また十有余年に亘る長い学校生活を終えたことも、歴史的現実であります。今はただ虚心坦懐に生き生きと胸を張って何ものにも負けない気力を唯一の支えとして新生活に出発して下さい。前向きの姿勢を以って積極的に勤めれば、道は自ら開けてくるものです。ことに当たって遲疑逡巡してはなりません。諸君に特に望むことは剛毅果敢であることです。今も、そしてこれからも先もずっとそういう強い意志と楽天的な心構えで、決して迷わない生き方をして欲しいと思います。

人の一生は棺を覆うて定まるといいます。我々はいつか人生の卒業を迎えなければなりません。その道程を悔いなく歩みたいものです。それぞれに充実した人生を送りたいものです。この道を行くに当って近くを見なければ転ぶでしょうし、また遠くを見なければ大きく方向を誤ることになります。我々は日々当面する問題に対処しなければならぬと同時に、常に長期的視野をもっていることが大切です。歴史的法則の見方考え方を明らかにするのが社会科学であります。諸君は本学でそれを学んだのであります。何人も歴史の流れを止めることは出来ません。人は歴史的法則を知ることによって、より自由に、より人間的に、より創造的に生きることが可能なのであります。今日社会の課題と展望を人々は、六十年代、七十年代、八十年代という区切りでもってとらえようとしています。しかし、それは社会評論の為の一つの方便であって、社会の歴史そのものがそういうよう

に区切られているわけではありません。周知の通り、今年に入って物価騰貴、石油エネルギーの問題、雇用福祉の後退、国際的緊張の高まり等々、内外に亘る政治的、経済的不安が激化しています。大切なことは、これら諸現象の底にあるものは何かということを正しく把握することです。そして、今日の諸現象を歴史の長い大きな波長（うねり）の中に位置づけて見ることです。経済学の危機を叫ぶ声があります。しかし、科学としての経済学が自由に研究できる限り学問自体の危機はありません。現実にあるのは科学の危機ではなく、科学の対象そのものの危機と考えるべきだと思います。

さて、私は現在の社会的諸情勢の中で、平和の問題が特に重要であると考えます。経済的社会的政治的行き詰まりが軍事的方策で打開されようとする動きは、単に過去の歴史的教訓であるばかりでは無く、今日きわめて現実的潜勢的なものであるとみるべきでありましょう。

「危機の時代」「混迷の時代」と呼ばれるとき一方では「非常時」「軍備増強」「徴兵制復活」等々の危険な声が聞こえてきます。今こそ歴史に学び現実を冷静に分析し真実を追求して平和を確立する為に努力しなければならぬ時であると確信します。

ともあれ諸君はこの激動の時代を乗り切る為に、第一に精神を強くし常に健康に留意すべきであります。第二に、これから心新たにして勤勉に生活し更によく学ぶことを忘れないことです。諸君の卒業論文は、一つの習作でありイントロダクションであると考えべきでしょう。これからが本当に身につく勉強をする時期であります。職業生活をしながら常に学ぶ心を生涯にわたって失わないことを希望して止みません。諸君とともにわが学園も創立五十七年を迎え、一層の充実発展の節目に立っています。五十六年間、本学の象徴であった旧本館は諸君の卒業と同時にその生涯を終え、新しくそしてより大きく生まれ変わろうとしています。諸君の学問の故郷は更に装いを新たにして発展するのであります。我々は末長い学園の

発展を実現すべく、全教職員一致協力して努力することを誓います。

最後に、諸君がこれから先一層魅力ある人物となり、そして魅力ある社会を建設することに役立って欲しいと思います。諸君の前途のご多幸を心から祈念して式辞と致します。

昭和五十五年三月十九日

松山商科大学学長 稲生 晴⁹⁾

この式辞のなかには、稲生先生のマルクス主義の思想・信条、学問的方法論、学識が表明されている。ただ、校訓「三実主義」については何の言及もなかった。

3月21日、大学院経済学研究科（修士・博士）、経営学研究科（修士）の入試（第2次）が行なわれ、経済は修士1名が受験し、1名が合格した。経営は4名が受験し、4名が合格した¹⁰⁾

3月31日、経済学部では、大学院経済学研究科の設置要員として採用された国沢信（計量経済学）、大鳥居蕃（国際経済論）、上田藤十郎（日本経済史）が退職した。経営学部では、菅野源一郎（商品学・化学）、田辺義治（体育）が退職した。人文学部では、渡植彦太郎（社会学）、大道安次郎（社会学史）、升元正爾（英語）らも退職した¹¹⁾

2) 1980年度

稲生晴学長1年目である。経済学部長は望月清人が続けた。経営学部長は岩国守男に代わって新しく高沢貞三が就任した（1980年4月1日～1984年3月31日）。人文学部長は星野陽が1980年10月31日まで務めたが、病気辞任し、11月1日から渡部孝に代わった（1980年11月1日～1984年10月30日）。経

9) 松山大学総務課所蔵。

10) 『学内月報』第40号, 1980年4月1日。『六十年史（資料編）』161頁。

11) 『学内月報』第40号, 1980年4月1日, 『温山会報』第23号, 1980年11月。

経済学研究科長は入江奨、経営学研究科長は神森智が引き続き務めた。

全学の校務体制は、教務委員長は辻悟一に代わって新しく原田満範が就任した(1980年5月1日～1986年3月31日)。学生委員長は高橋久弥、入試委員長は岩橋勝が引き続き務めた。図書館長は元木淳に代わって、新しく田辺勝也が就任し(1980年4月1日～1983年3月31日)、経済経営研究所長も宮崎満に代わって、新しく辻悟一が就任した(1980年4月1日～1981年3月31日)。事務局長は墨岡博が続けた。

学校法人面では越智俊夫、中川公一郎、伊達功が引き続き理事を務め、稲生理事長を支えた¹⁾

本年度も、新しい教員が採用された。経済学部では、川東埜弘(1947年11月香川県生まれ、大阪市立大学大学院経済学研究科博士課程、日本学術振興会奨励研究員、日本経済論、農業経済論)、河野良太(1948年熊本県生まれ、神戸大学大学院経済学研究科博士課程、経済原論Ⅲ)が講師として採用された。日本経済論はそれまで複数の教員が担当してきたが、本年度から川東が担当することになった。経営学部では吉田美津(和歌山県生まれ、同志社大学大学院文学研究科博士課程、英語)、松村英介(大阪府生まれ、体育)が助手として、人文学部では小池春江(英米文学)が教授として採用された。また、昇格人事があり、経済学部では、村上克美と青野勝広が教授に、久保進、大浜博、田中七郎が助教授に昇格し、経営学部では岡野憲治、渡部和俊、高田るい子が助教授に、高尾典史が講師に昇格している²⁾

4月1日、稲生学長は、新入生に対し、『学園報』第47号に「新入生に与えることば—心を起こし身を起こせ—」を載せ、そこで、本学における大学生活に勝負をかけ、大学で本物の勉強をしてもらいたい、昔から『詩をつくるより田をつくれ』という格言があるが、田を作ると同時に詩をつくることも重要で、大学で人間文化を培い耕していると胸を張っていえるような大学生活をおくっ

1) 『六十年史(資料編)』126～131頁。

2) 『学内月報』第40号、1980年4月1日。

てほしい、と述べている³⁾

4月5日、午前10時より入学式が体育館にて挙行され、経済学部500名、経営学部471名、人文学部英語英米79名、社会119名、計1,169名が入学した。経済学研究科修士課程は3名（片岡孝暢ら）、経営学研究科修士課程は4名が入学した⁴⁾この入学式のとて、全学の教員が壇上にあがり、各学部長から一人一人の教員の紹介・顔見せがなされたが、和気藹々たる大学の風景であったことを記憶している。

この入学式の稲生学長の式辞は、総務課所蔵の式辞資料の中になく、残念ながら未見である。

9月16日、大学院（修士）の入試（9月期）が行なわれた。経済学研究科の志願者はいなかった。経営学研究科は2名受験し、2名が合格した⁵⁾

9月30日、新本館（現本館）の定礎式が行なわれた。

11月20日、学校法人松山商科大学評議員の任期満了（11月末）に伴う選挙が行なわれ、教育職員の当選者は、入江奨、岩国守男、越智俊夫、神森智、高沢貞三、田辺勝也（新）、伊達功、中川公一郎、比嘉清松（新）、望月清人、山口卓志（新）、渡部孝であった⁶⁾任期は12月1日から3年間であった。

11月21日、稲生学長・理事長ら大学当局は文部省に大学院経営学研究科博士課程設置協議書を提出した⁷⁾

本年度も学生の自主的研究活動の発表の場である、第20回中四ゼミ（12月13、14日、本学）、第27回全日ゼミ（インゼミ）が開かれているが、その詳細は不明である⁸⁾

12月23日に、松山全日空ホテル4階の「万葉の間」にて、1980年の忘年会

3) 『学園報』第47号、1980年4月1日。

4) 『学内月報』第41号では経済学修士4名、経営学修士3名となっているが、間違い。『六十年史（資料編）』161頁では、経済学修士3名、経営学修士4名となっている。

5) 『学内月報』第46号、1980年10月1日。『松山商科大学一覽』1980年度。

6) 『学内月報』第48号、1980年12月1日。

7) 『松山大学90年の略史』54頁。

8) 入江奨「学生の自主的研究活動の動向の一齣」『六十年史（写真編）』247～250頁。

が実施された。松山商大「家族主義」のあらわれであり、和やかな会合であったと、記憶している。

12月31日、理事の越智俊夫と伊達功が退任し、1981年1月1日より、望月清人（1981年1月1日～1983年11月31日）と岩国守男（1981年1月1日～1983年12月31日）が新しく理事に就任し、稲生理事長を支えることになった⁹⁾。

1981年1月26日午前11時半より本館（地下1階、7階建）と5号館（3階建）の落成式が本館の6階ホールで行なわれた¹⁰⁾。

2月10日～12日にかけて、1981年度の入試が行なわれた。入試制度は岩橋勝入試委員長のもとでこれまでと大きく変更された。それは、人文学部の試験日を早めたこと、また、これまで同一日に実施していた経済、経営の入試を切り離し、3学部を3日連続で単独で試験を行なうことにし、経済学部が2月10日、経営学部が2月11日、人文学部が2月12日とした。試験場は従来通りで、本学、東京、京都、岡山、広島、福岡、高松の7会場で行なわれた。試験科目は選択科目を昨年までの7科目から数ⅡBを廃止して6科目とした。試験時間は各科目とも10分ずつ短縮し、国語・選択が70分、英語を90分とした。また、英語・国語の一部にマーク式が導入された。募集人員は文部省定員通りで、経済・経営両学部とも350名、人文学部は英語英米文学科が80名、社会学科が100名であった。志願者は経済が3,157名（前年1,842名）、経営が2,521名（前年2,006名）、人文英語が431名（前年454名）、社会が885名（前年1,336名）、合計6,994名で過去最高となった。検定料は1万6,000円（前年度と同じ）。合格発表は2月23日で、経済学部が1,131名、経営学部が993名、人文学部英語英米文学科が225名、同社会学科が300名を発表した。なお、学費は入学金は13万円（前年度と同じ）、授業料は25万円（前年度20万円）、

9) 『学内月報』第49号、1981年1月1日。

10) 『学内月報』第50号、1981年2月1日。『六十年史（資料編）』の年表。『松山商科大学一覽』1980年度、159頁。

維持費0円（前年度5万円）、施設拡充費は4万円（前年度2万円）、その他（温山会費、自治会費、生協出資金等）が2万9,550円で、合計44万9,550円であった。今年度から維持費を授業料の中に入れた。前年度に比し2万円の値上げであった¹¹⁾

2月18日、望月清人経済学部長の任期満了に伴う経済学部長選挙が行なわれ、新しく高橋久弥教授（50歳）が選出された¹²⁾

稲生学長は、3月1日、卒業生に対し、『学園報』第50号に「軽信を慎め」と題したはなむけの言葉を載せ、そこで、情報社会の今日において、情報に毒されることがあるので、情報をよく吟味し、真偽をただし、軽信しないよう戒めている¹³⁾

3月20日、午前10時より第30回卒業式が体育館にて挙行された。経済学部443名、経営学部402名、人文学部英語英米112名、同社会96名が卒業した。また、経済学研究科修士課程は4名、経営学研究科修士課程は2名が修了した¹⁴⁾

稲生学長の卒業式の式辞は、次の通りで、現代世界は種々の矛盾対立を抱えて激しく流動する変革の時代であること、歴史は天才や偉人が造るものではなく、大衆としての人間が造るものだとかを述べ、真実に生きよと呼びかけた。

「本日茲にご来賓並びに御父兄の御臨席を得て、昭和五十五年度学位記卒業証書授与式を挙行致しますことは本学教職員一同のもっとも喜びとす

11) 松山商科大学『昭和56年度入学試験要項』、『学内月報』第50号、1981年2月1日。『学内月報』第51号、1981年3月1日。なお、この年は各学部とも補欠を出し、経済学部1,177名、経営学部1,118名、人文英語260名、人文社会340名の合格者となった（『学内月報』第52号、1981年4月1日。『六十年史（資料編）』174頁、『松山商科大学一覽』1980年度、8、9頁）。

12) 『学内月報』第51号、1981年3月。

13) 『学園報』第50号、1981年3月1日。

14) 『学内報』第52号、1981年4月。なお、『六十年史（資料編）』141頁は、経済学部447名、経営学部405名、人文英語113名、社会96名で、それは1980年9月卒業生を含んだ数字。

ることです。

卒業生並びにご家族の方々にたいしまして衷心よりお祝い申し挙げますと共に、多数の関係各位のご祝意にたいしまして厚くお礼申上げる次第であります。

本日芽出度く所定の課程を終え学窓を巣立つ者は、大学院経済学研究科修士四名、同経営学研究科修士二名、経済学部四四三名、経営学部四〇二名、人文学部英語英米文学科一一二名、同社会学科九六名、総計一、〇五九名であります。昭和元年に第一回の卒業生を出して以来、本学園の出身者は既に二万有余を数えるに至り、社会の各分野におけるその活躍は学園の大きな支えとなっております。今や諸君が新たにその陣列に加わるに依り、卒業生の努力が一段と伸展し社会の発展に寄与することを思うとき、誠に心強いものを覚える次第であります。

扱て卒業生諸君、諸君は長い学校生活を経て、今最後の大学教育を修了したのでありますが、諸君が本学で学び得たものは何でありましょうか。諸君にとって大学生活とは何であったでしょうか。それぞれの感慨があり、それぞれの反省があると思います。その反省をこれからの新しい社会生活に生かしていくことが大切です。勤勉に生活した者はさらに勤勉に、怠惰であったと思う者は今からその分を償う努力を思い切ってやってほしいものです。

大学で学んだもので、直ちに実社会の仕事に役立つものはないと言ってよいでしょう。明日からの職業生活を控えて、諸君は期待と同時に一種の無力感と不安を抱えていることでしょう。この心境は、大学から職場へ出ていくあらゆる者に共通するところでもあります。そういう諸君が、就職して一、二年もたつと見ちがえるような職業人になっています。社会のあらゆる職場は労働力によってその機能が左右されるのでありますから、労働力としての諸君を徹底的に鍛えなければならぬのであります。今何ができるかという事より、これから何ができるようにするのが問題です。その

為には真面目に誠実に息長く努力する事です。自分にできることを素直に実践することです。多くの人はできるけれどもしたくない、したいけれどもできないという矛盾をかかえて、無駄に時を過す傾向があります。失敗を怖れず勇敢に実践する事です。為せば成る、為さねばならぬ何事も、ならぬは人の為さぬなりけりという精神（信念）を堅持して、自らの人生をそれぞれに開拓してほしいものです。

諸君の社会史における現代はいかなる時代でありましょうか。生産手段の発達、富の生産と消費が、これほど短時間にこれほど巨大化した時代はないでしょう。人間社会と自然環境との対立が地球的規模となり、さらにそれを越える空間にまで広がる恐れが表れています。社会的、自然的にバランスのとれた発展を制御する力が求められなければならぬ時代です。問題は、このような物質的生産力に適合する社会的関係の変革でありましょう。国内と世界の情勢が種々の矛盾対立を抱えて激しく流動していることは、まさに変革の時代を表すもの（物語る）であります。

二十九億キロ（二九・四六）余も離れた土星にロケットを近付けたり、生命（生物）インタヘロン現象の神秘に迫る驚くべき進歩を生みながら、このわれわれの地球上の社会現象は政治においても、経済の面についても、いかに多くの事が霧の中に包まれベールに覆われていることか。変革の時代は、特に社会科学の進展を必要としているのであります。歴史は天才や偉人が造るものではなく、大衆としての人間が造るものです。現代の変革は、国民大衆としてのわれわれ一人一人の意志と力にかかっている事を自覚し、真実を追求し真実に生きなければなりません。本学において学んだ社会科学の方法と基礎的知識が、諸君の社会生活の中で生き続け、一層発展することを強く期待するものです。

最後に処世訓の中から一つを選び、驢のことばとしたいと思います。それは「軽信を慎む」ということであります。情報化社会と言われる今日、情報の量とスピードは益々大きくなり、われわれの個人的、社会的生活に

重大な作用をもたらしています。情報のインフレーションは、同時に情報の無秩序、無責任や悪用を生み、個人や社会の利益を損う傾向をもっていると見るべきでしょう。人は情報の媒体（メディア）に支配され情報商品を物神化しているのではないのでしょうか。

他人にたいし、情報にたいして、慎むべきは軽信であります。軽信の人は一見善人に見えるのでありますが、善人であろうとする人が軽信の故に悪徳を犯すことを忘れてはならないと思います。

自分が傷つかない為には人を傷つけない事です。軽信は人を損い、社会を損い、そして結局において自らを損う重大な悪徳であることを強く意識し、日常の生活に処すべきであります。

終りにあたり、諸君のご健闘と前途の御多幸を心から祈念して式辞と致します。

昭和五十六年三月二十日

学長 稲生 晴]¹⁵⁾

この式辞のなかには、真実を追求せよとか、人を傷つけないようにとかが述べられているが、校訓「三実主義」そのものについての言及はない。

3月23日、経済学研究科（修士・博士）、経営学研究科（修士）の入試（3月期）が行なわれ、経済は修士4名が受験し、3名が合格した。博士はいなかった。経営は修士4名が受験し、4名が合格した¹⁶⁾

3月26日、文部省より経営学研究科博士課程設置認可がおりた¹⁷⁾

3月31日、経営学部の門前貞三（教育学、フランス語）、渡辺和俊（経営学）らが退職、転職した¹⁸⁾

15) 松山大学総務課所蔵。

16) 『六十年史（資料編）』161頁。なお、経営は9月期と3月期をあわせた人数。『松山商科大学一覽』1980年度。

17) 『六十年史（資料編）』86頁。

18) 『学内報』第52号、1981年4月1日。

3) 1981 年度

稲生晴学長 2 年目である。経済学部長は望月清人に代わって新しく高橋久弥が就任した（1981 年 4 月 1 日～1983 年 3 月 31 日）。経営学部長は高沢貞三，人文学部部長は渡部孝が続けた。経済学研究科長は入江奨が続けた。経営学研究科長は神森智に代わって新しく元木淳が就任した（1981 年 4 月 1 日～1983 年 4 月 1 日）。

全学の校務体制は，教務委員長は原田満範が続けた。学生委員長は高橋久弥に代わって新しく青木正樹が就任した（1981 年 4 月 1 日～1983 年 3 月 31 日）。入試委員長は岩橋勝が続けた。図書館長も田辺勝也が続けた。経済経営研究所長は辻悟一に代わって新しく山口卓志が就任した（1981 年 4 月 1 日～1983 年 12 月 31 日）。事務局長は墨岡博に代わって，竹田盛秋が新たに就任した（1981 年 4 月 1 日～1987 年 3 月 31 日）。

学校法人面では中川公一郎，望月清人，岩国守男が引き続き理事を務め，稲生理事長を支えた¹⁾。

本年度も，新しい教員が採用された。経済学部では，九州大学助手の清野良栄（1950 年 1 月生まれ，九州大学大学院経済学研究科博士課程，経済原論Ⅱ），館野日出男（1949 年 6 月生まれ，上智大学大学院文学研究科博士課程，ドイツ語）が講師として採用された。経営学部では藤井泰（1954 年 1 月生まれ，広島大学大学院教育学研究科博士前期課程，教育学），森本三義（1952 年 4 月生まれ，大阪大学大学院経済学研究科経営学専攻後期課程，簿記原理）が講師として採用された，人文学部では鮎川潤（1952 年 3 月生まれ，大阪大学大学院人間科学研究科後期博士課程，社会病理学）が講師として採用された²⁾。

稲生学長は，4 月 1 日，新入生に対し、『学園報』第 51 号に「新入生歓迎の

1) 『六十年史（資料編）』126～131 頁。『学内報』（従来の『学内月報』の改題）第 52 号，昭和 56 年 4 月。

2) 『学園報』第 51 号，1981 年 4 月 1 日。『学内報』第 52 号，1981 年 4 月 1 日。

ことば-流れに抗して自己形成を-」を載せ、そこで、安易な流れに抗し、主体的意欲的に学び、自分の頭で考えていく能力を養ってもらいたいと、述べた³⁾

4月1日、入学式が体育館で行なわれた。経済学部が445名、経営各々が469名、人英が101名、人社が127名入学した、経済学研究科では修士3名、経営学研究科では修士3名、博士1名が入学した⁴⁾

稲生学長の式辞は次の通りで、1968年のパリ5月革命に端を発し先進諸国に広がった大学紛争や昨今の校内暴力等を社会病理現象として捉え、その真相・原因・本質を論じ、新入生に対し、自分の頭で考え、まとめていく能力を養ってほしいと述べた。

「本日茲に御来賓各位、並びに多数の御父兄の御臨席を得て、昭和五十六年度大学三学部及び大学院二研究科の入学式を挙行しますことは、我々教職員一同のもっとも喜びとするところであります。

本日の栄ある式辞にお寄せられた関係各位の御祝詞にたいしまして厚くお礼申し上げますと共に入学生並びに御家族の皆様たいしましては衷心よりお祝い申し上げます。

新入学生諸君、本学は今年をもって五十八年の歴史を閲することになります。諸君は創立以来五十八回、大学制度で数えると三十二回目の入学生という事になります。学園の長い歴史と伝統と、そして未来への発展を担う清新な諸君を迎える事が出来たことは、本学教職員、在學生は元より卒業生一同にとりまして殊に大きな喜びであります。学園発展の新たなエネルギーである諸君を心から歓迎する次第であります。

3) 稲生晴「新入生歓迎のことば-流れに抗して自己形成を-」『学園報』第51号、1981年4月1日。

4) 『学内報』第53号、1981年5月。なお、『六十年史(資料編)』161、174頁、『松山商科大学一覽』1980年度では、経済学部が442名、経営各々が468名、人英が101名、人社が125名。それは後者は5月1日の在籍者のためだろう。

扱て、小、中、高校と長い学校生活を経て今、大学の門に入り、これから愈々新しい、そして最終の学生生活のスタートを切る諸君にたいし、諸君の大学生活が悔いのないものである、夫々の人生を豊かにする過程となることを切望して激励の言葉を申述べたいと思います。

今から十三年前というと諸君の幼稚園時代であります、一九六八年五月、パリ大学を中心にカルチェ・ラタンメナンテール文科大学を主な舞台として、いわゆる学園紛争が発生しました。紛争は労働者をも巻き込み世にいう五月事件、五月革命となったのであります。大学紛争は地球上を馳ける電波のように先進諸国の諸大学に広がり、わが国でも東大紛争を始め全国の大学に及んだのであります。学生は大学を封鎖し施設を破壊して大学の機能を停止しました。この紛争の真相は何であったのでしょうか。学生、教職員、及び家族の貴重な人命と生活を犠牲にした紛争の意味するものを正しく捉え歴史的教訓とすることは大学の中に居る者の務めであり、ます。大学紛争の嵐は過ぎて今や中学、高校における校内暴力、教育の荒廢が、先進諸国の共通の症状となっています。大学紛争、校内暴力は共に複雑な諸要素をもつものであります、私は基本的に社会病理現象として捉えなければならぬと考えるものです。

一般的（概括的）に言つて、今日の先進文明社会においては、人間による自然界の征服、支配、管理が無制限に押し進められ人間による人間界の征服、支配、管理をめぐる人間相互の闘いが社会的強制となり、個々の人間の魂の内部では知性と感情の調和が失われて、知性は冷たい知性となり、感情はどす黒い情念に変貌していると言えるのではないのでしょうか。思春期の青少年層はこのような現代社会の不安定性と人間性の疎外を敏感に感受し、そのうち限界状況におかれた者、或は落ちこんだ者が暴発、暴走するとみるべきでありましょう。

こういう状況を生み出したものは人間であり、人間の問題でありますから、これを解決するのも人間の力以外に無いのであります。社会を支え、

歴史をつくるのは、大衆、庶民としての人間であります。大学に学ぶ大衆としての我々はこの事を強く自覚し、巨大にして複雑な社会構造とその支配力に屈服、隷従する事なく真理を探究し、自らの人間的知性と情操を豊かにするよう努力しなければならぬのであります。

最後に諸君の本学における大学生としての生活をより充実したものとするために、是非肝に銘じてもらいたい心構えを三点に絞って申し挙げたいと思います。

第一に、大学や学部・学科についての選択の迷いをこの場において潔く払拭し、大学生としてここできっぱりと成仏する覚悟を定めて欲しいと思います。商大生としての生活に自らを賭る気構えをもつことです。迷いの為集中力を失ない、切角のチャンスを生かしきれず自滅する例は少ないのです。

第二に、自分の能力を自ら固定的に考え自分はこの程度しかできない者だときめつけたり諦めたりしない事です。怠惰による結果を能力の限界にすりかえてはなりません。もっと青春の覇気を持ち、負けないぞという気力、やるぞという気力を持つことが大切です。

第三点は、学び方、勉強の仕方について断然頭の切りかえをしてもらいたいと思います。極端な言い方ではありますが、これまで諸君が苦勞してきた知識詰め込み型、受験技能型の勉強は、大学では根本的に変更しなければならないという心構えをして欲しいのであります。大学でも、勿論知識を広く多くする事は必要です。しかし、更にそれを土台にして自ら読み、調べ、観察し、自らの頭でものを考え、まとめていく能力を養うことを心掛けて頂きたいのであります。

終りにあたり、本学において諸君が親密な師弟関係、良き友人関係を積極的に形成すること、そして読書と思考の習慣を身につけて、長い人生航路の基礎能力をつくりあげる事を強く期待するものです。

諸君の大学生活の成功を心から祈念して、式辞と致します。

昭和五十六年四月一日

松山商科大学長

稲生 晴 』⁵⁾

原田教務委員長のもと、本年度から松山商大は学事日程を大きく変更した。かねてよりの学内世論に従い、従来は夏休み明けに1週間程授業を行ない、後、前期試験をしていたが、夏休みに入る前に前期の授業と試験を終了することにした。それは学生に対し教育効果を高めるとともに夏休みを有効に利用できるようにするためであった。また本年度から、専門ゼミのゲストスピーカー制度が実施された。さらにまた、本年度からカリフォルニア州立大学サクラメント校における短期英語研修講座を始めた⁶⁾

7月、稲生学長は学部長会を発足させた。大学運営の民主的運営の制度化である。

9月20日、大学院の9月期入試（修士課程）が行なわれた。経済学研究科は合格者ゼロ、経営学研究科は4名の合格があった⁷⁾

本年度も、学生の自主的研究活動の発表の場である第14回学内ゼミ、第21回中四ゼミ（12月12～13日、広島経済大）、第28回インゼミ（12月21～23日、福岡大学）が開かれ、各ゼミが取り組んだ。例えば経済学部の入江ゼミは中四ゼミで「スミスとケインズの比較研究」、インゼミでは「アダム・スミスの『国富論』における資本蓄積論の展開」を報告している⁸⁾

1982年2月9日～11日にかけて、1982年度の入試が行なわれた。2月9日が経済学部、2月10日が経営学部、2月11日が人文学部であった。試験場は従来通りで、本学、東京、京都、岡山、広島、高松の7会場で行なわれた。募

5) 松山大学総務課。

6) 『学園報』第52号、1981年7月1日。

7) 『学内報』第58号、1981年10月1日。

8) 『つくし』第14号、1982年4月1日、21頁。入江奨「学生の自主的研究活動の動向の一齣」『六十年史（写真編）』247～250頁。

集人員は経済・経営両学部とも350名、人文学部は英語英米文学科が80名、社会学科が100名であった。志願者は経済が2,919名(前年3,157名)、経営が2,806名(前年2,521名)、人文英語が495名(前年431名)、社会が848名(前年885名)、合計7,068名(前年6,994名)で微増であるが、過去最高となった。経済が減って経営が増えているが、隔年結果現象の現われであった。検定料は1万8,000円、合格発表は2月20日。目標入学者数は経済・経営が450名、人文英語が100名、社会が130名で、歩留りを考慮して、経済学部が1,107名、経営学部が1,049名、人文学部英語英米文学科255名、社会学科355名を発表した。しかし、各学部とも目標をたっせず、その後補欠を出し、経済学部が26名、経営学部が83名、人文学部英語英米文学科が26名、社会学科が26名を発表した。なお、学費は入学金は13万円(前年度と同じ)、授業料は27万円(前年度25万円)、施設拡充費は5万円(前年度4万円)、その他が2万9,550円で、合計47万9,550円で3万円の値上げであった⁹⁾

3月20日、午前10時より本学体育館にて第31回卒業式が行なわれた。経済学部397名、経営学部443名、人文英語60名、人文社会79名が卒業した。また経済学研究科修士1名(片岡孝暢)、経営学研究科修士3名が修了した¹⁰⁾

稲生学長の式辞は次の通りで、1980年代初頭のスタグフレーションの状況を述べ、現下の経済矛盾を打開する道として、戦前の様な軍事化ではなく、平和経済の道を見出すよう努めなければならぬと述べた。

「本日茲に多数の来賓の御臨席を戴き、昭和五十六年度学位記・卒業証書授与式を挙げてきましたことは、本学のもっとも慶びとするところであ

9) 『学内報』第61号, 1982年1月1日。『学内報』第62号, 1982年2月1日。『学内報』第63号, 1982年3月。『学内報』第64号, 1982年4月1日。『松山商科大学学園報』第54号, 1982年3月1日。増田豊「(昭和57年度)入試状況」『温山会報』第25号, 1982年11月。

10) 『学内報』第64号, 1982年4月1日。なお、『六十年史(資料編)』141頁は前期卒業者を含み、経済学部402名、経営学部450名、人文英語60名、人文社会79名。

ります。

御臨席の各位に対しまして厚く御礼申し上げますと共に、卒業生並びに御家族の方々に対しては、心からお祝いを申し上げます。

本日芽出度く所定の課程を終えて学窓を巣立つ者の総数は九八三名であります。昭和元年に第一回の卒業生を出して以来、本学園の出身者は既に二万数千名数えるに至り、社会の各地域各分野におけるその活躍は学園の大きな支えとなっております。卒業生諸君、今や諸君が新たにその仲間に加わるにより、卒業生の勢力が一段と伸展し益々社会の発展に寄与することを思うとき、殊に心強いものを覚える次第であります。

扱、今や小学校以来、十六ヶ年以上の長い学校生活に終りをつけて、愈々職業生活に入って行く諸君の前途の御多幸を祈り、驢の言葉をおくりたいと思います。

今日、我々が当面している社会情勢は大変厳しいものであります。古今東西を問わず、人間社会の根本が経済であること、また各国経済が時とともに急速に国際的連関を強め、世界経済の緊密な構成分子に組み込まれていることは、本学において諸君が学ばれたところであります。今日の経済が迎え（おかれ）ている特徴は、経済成長の停滞とやむことなき（硬直的な）物価上昇、いわゆるスタグフレーションであります。七十年代から顕著になってきたスタグフレーション経済は、十年を経て今や全般的な不況の色を濃くしています。失業の拡大、内需不振、生産投資の伸びなやみ、国家財政の悪化、国際貿易の減少傾向、貿易摩擦、勤労者所得の実質的な目減り、福祉と生活の不安、企業倒産の増加は、すべて相互に関連した（構造的に）経済矛盾の表れであります。此の様な内外の経済的困難が、はたしてどういう解決を見出しうるか、正に風雨波浪注意報の経済とみるべきでありましょう。私は日本経済が明日にも破綻するとか、一九三〇年代と同じように国際的大不況が発生するとは考えません。しかし諸君の時代史が今や重大なターニングポイントに立っていることを強調しておきたいの

であります。選択の時代、変革の時代と呼ばれるとき、私は現下の経済矛盾が平和経済の進路を選択して、解決の道を見出すよう努めなければならぬと思う者であります。戦後の平和と繁栄を享受してきた我々は、今一度一九三〇年代の歴史的教訓を学ぶ必要があるのではないのでしょうか。今、進行しつつある経済問題を早期に、しかも何らの犠牲も、しわ寄せも、スクラップもなしに解決する方法はないでしょう。我々は職場において、家庭生活において、より苦勞し辛抱することを覚悟し、それに耐え、それに挑戦することによって将来の安定と繁栄を購うべきであります。

諸君にとって当面の生活が重要であることは当り前の事です。しかし十年先、二十年先の事を考えることをおろそかにすべきではないでしょう。二十年後には二十一世紀に入っています。この様な過渡期を支えるのは、諸君の年代であります。諸君は、明治以降の大きな年代で分ければ、三代目に当たります。「売り家と唐様で書く三代目」という古い川柳をご存じでしょうか。初代が苦勞して築いた家も、財産も、三代目が受け継ぐ頃になると遊芸で身を持ち崩し、自分の家を売り出すようになる。その為に自ら書いた「売り家」という札が中国風のしゃれた書体であり、仕事をせずに遊び暮した生活が偲ばれる、という意味です。物質的生活は豊かになったがその反面、人間が衰弱してきていることは社会の歴史的進歩にとって殊に憂慮すべき事であります。諸君は時流に抗して、更に一層、知力、体力、精神力を鍛え、全人的な力を挽回して欲しいものです。われわれの後継ぎとして、家庭的にも、社会的にも立派な三代目になってくれる事を心から期待してやみません。「汝自身を知れ、お前の仕事のために、たゆまざる鍛錬をもって、お前を鍛え学べ」というゲーテのファウストの言葉を諸君に捧げます。終りにあたり、こころから諸君の健康を祈り、諸君が常に前途に光明を見つめて、邁進せられることを願い、諸君に対するはなむけの言葉と致します。

昭和五十七年三月二十日

松山商科大学

学長 稲生 晴 J¹¹⁾

この式辞はゲーテのファウストを引用する学識高いものであるが、本年も、校訓「三実主義」についての言及はなかった。

3月23日、大学院（修士・博士）の入試が行なわれ、経済学研究科修士9名が受験し、3名が合格した。経営は修士7名が受験し、5名が合格した¹²⁾

3月31日、経済学部の増岡喜義（財政学、元学長、1903年12月生まれ、この時78歳）が退職した。また、吉田建夫（経済原論）が退職し、摂南大学に転出し、鈴木陽一（中国語）も退職し、神奈川大学に転出した。経営学部では高石頼三郎（自然科学概論、物理学）らが退職した。なお、経営学部の辻悟一（経済地理）は1981年9月30日に退職し、大阪市立大学に転出している¹³⁾

4) 1982年度

稲生晴学長3年目である。経済学部長は高橋久弥、経営学部長も高沢貞三、人文学部長も渡部孝が引き続き務めた。経済学研究科長は入江奨、経営学研究科長は元木淳が引き続き務めた。

全学の校務体制は、教務委員長は原田満範、学生委員長は青木正樹が引き続き務めた。入試委員長は岩橋勝に代わって新しく増田豊が就任した（1982年5月1日～1984年3月31日）。図書館長は田辺勝也、経済経営研究所長は山口卓志が引き続き務めた。事務局長は竹田盛秋が続けた。

学校法人面では中川公一郎、望月清人、岩国守男が引き続き理事を務め、稲生理事長を支えた¹⁾

11) 松山大学総務課所蔵。

12) 『六十年史（資料編）』161頁。受験者、合格者は1次、2次の合計。

13) 『学内報』第64号、1982年4月1日。『温山会報』第25号、1982年11月。

1) 『学内報』第64号、1982年4月1日。『六十年史（資料編）』126～131頁。

本年度も新しい教員が採用された。経済学部では増野仁（1947年10月生まれ、東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程、中国語）、間宮賢一（1954年10月生まれ、神戸商科大学大学院経済学研究科博士課程、価格理論）が講師として採用された。経営学部では高橋紀夫（1952年3月生まれ、中央大学法学研究科博士課程、商法手形小切手）が講師として、塩次喜代明（1947年10月生まれ、神戸大学大学院経営学研究科博士課程）が助手として、人文学部では奥村義博（1951年2月生まれ、関西学院大学文学研究科博士課程、英語）が講師として採用された²⁾。

稲生学長は4月1日、新入生に対し、『学園報』第55号で「生き方への挑戦－新入生諸君へ－」を載せ、自分にはできないと自己限定することなく、自分に挑戦し、積極的行動的な学生生活を実行し、自分はやったぞという充実感を体得してほしい、と述べている³⁾。

4月1日、午前10時より本学体育館にて入学式が挙行された。経済学部452名、経営学部461名、人文学部英語英米103名、社会134名が入学した。経済学研究科は修士課程3名が入学し、経営学研究科は修士課程4名が入学した⁴⁾。

稲生学長の式辞は次の通りで、大学は学問の府であり、自らの頭でものごとを主体的に考える創造的能力を養ってほしい、世の中は流動と混迷の時代であり、自らの幸福と社会の発展の為に創造的な能力を身につけて欲しい、そのためにはすべてを疑えと述べ、最後に、先生方と交わり、友を作り、書物に親しみ、充実した大学生活を望む、と述べた。

「春光地に満ちて万象生氣に漲る折柄、本日、茲に昭和五十七年度の入学式を挙行致しますことは、本学のもっとも喜びとするところであります。

2) 『学園報』第55号、1982年4月1日。『学内報』第64号、1982年4月1日。

3) 稲生晴「生き方への挑戦－新入生諸君へ－」『学園報』第55号、1982年4月1日。

4) 『学内報』第65号、1982年5月1日。『六十年史（資料編）』161、174頁。

来賓の方々、温山会、父兄会の役員の方々に対しまして厚くお礼申上奉るとともに、入学生諸君並びに御家族の方々に対しては、衷心よりお祝いを申上奉る次第であります。

新入生諸君、本学は今年をもって五十九年の歴史を閲することになります。諸君は創立以来第五十九回目、大学制度で数えると三十四回目の入学生であります。この長い松山商科大学の歴史と伝統と将来への発展を担う清新な諸君を迎えることが出来ましたことは、我々大学に職を奉じる者にとりまして、また在學生はもとより、卒業生にとりまして極めて大きな喜びであります。学園発展の新たな血潮であり、エネルギーである諸君を心から歓迎する者であります。

扱、小、中、高校と長い学校生活を経て、今わが大学の門に入り、これから愈々新しいそして最終の学生生活をおくらんとする諸君に対し、諸君の大学生活が悔いのないものになること、それぞれの能力を伸ばし、人間性を豊かにする過程となることを切望して激励の言葉を申し述べたいと思います。

松山商科大学は学問の府であります。諸君の大学生活には様々な部面があります。スポーツの生活もあるでしょうし、クラブ活動もあるでしょう。しかし本学は教育研究の杜でありますから、諸君の大学生活の中から学問を取り去ってしまったならば、大学生活というものは、成り立たないのです。私は、諸君がまず自主的に積極的に学問を修めるという決意を新たにしていきたいと思いますのであります。

今日、我が国の高校教育の教科メニューからみると、諸君の教養及び学力は相当に高いものになっていなければならぬ筈であります。しかし実態はどうでしょうか。我々のみるところでは、諸君は多くの立派な料理を次々と鵜呑みにしてきただけであって、良く消化し、自らの血とし肉としているとは言えないのではないかと思います。敢えて申しますならば、正確さにおいてコンピューターに及ばない人、頭に教科のプログラムがイン

プットされてきたような状態ではないでしょうか。高等学校における教育は、どちらかといえば知識習得型の教育であり、既存（成）の知識を受け入れていくという傾向が強かったのではないかと思います。大切なことは知識を広くもつこととともに、ものを考える力、構想力、展開力を身につける事です。大学での勉強の仕方は、諸君が自らの頭でものを考える主体的、創造的能力の開発、養成、鍛錬でなければなりません。自分の頭でものごとを分析し、推理し、判断し、構成することに努力すべきであります。

諸君は、平和で豊かな時代に育ちました。しかし、諸君がこれから大学生活を終えて社会人としてくらして行かねばならぬ時代は、大変厳しいものがあると思われまます。内外の情勢は、正に模索と転換の時代であることを示しています。世の中は大きく変わりつつあります。この流動と混迷の時代を切り開（拓）いていく使命を諸君が担っていることは確な事であります。諸君は自らの幸福と、自らが存在しうる社会の発展の為に、真に人間的な、創造的な能力を身につけなければならぬのであります。

「すべては疑い得る」という言葉は、学問、科学の基本姿勢を示しています。伊豆、三島の禅寺に「大疑堂」というのがあるそうですが、大学というところは正に大疑堂でなければなりません。諸君は学問を神棚に祭りあげて、物神化したり、敬して遠ざけることがあってはいけません。学問を人生を大いに疑い、疑いを抱いて、大いに学ぶことです。各自の主体的な疑問を大切に、それを忠実に考えようとする態度から学問に対する興味や関心が高まり、理解も進むのであります。そうして初めて、諸君の人間ができていくのであります。

次に大学生活を始めるに当って心を新たにして、人間の、そして自分の生き方を考えてほしいと思います。人間にはいろいろなタイプや生き方がありますが、大雑把に分けると対照的な二つになるのではないのでしょうか。一つは陽気で行動的でその場の環境に素早く適応するタイプであります。もう一つは少々陰気で課業や環境に対して不平、不満が常に先き立ち、

なかなかエンジンのかからぬタイプであります。前者は集団の中でよく活動し、他人とよく直流し、よく交流し、自らの生活を自らの手で造り出していく、積極的な行動派であります。こういう生き方をすると、同じ時間と空間の中で得られるものは倍加するものがあると思います。人間には様々な血液型があるように、性格もいろいろであります。しかし大学生であり、一人前の人間である諸君は、自分の心構えと努力によって、自己を制御し、自己にうちかって、健康的な、創造的な生き方ができるのであります。それができないというのは、しないということであり、怠惰であるという以外にありません。

扱、最後に本学において諸君が、その人間的能力を鍛え、かつ充実した学生生活をおくる為、特に三つのことを実行してほしいと思います。

その第一は、諸君が先生方との交際を緊密に積極的に行うということです。自ら考える能力を養う方法にはいろいろありますが、その中で最も重要なことは、先生という人間と人間的によく交流することです。先生に親しく接し、自らの考えをつくり、先生と議論をし、それを通じて自分の識見を高め、思考能力を養っていくことができるのです。さらに又、先生と密接に交流することに依って、先生の学問、人柄に触れ、そして一生、その先生方とお付き合いをしていくことが、どれほど諸君の人間形成と人生を豊かなものにするか、測りしれないものがあります。大学の先生は近付き難いと思うのは大きな間違いです。先生方は諸君がよく接触してくれることに喜び、強く期待しているのです。用事と思う用事がなくても、先生に会ってほしいと思います。

第二の点は、この大学において新たに真の友をつくるという事です。「友情は人生の花である」という言葉は私の好きな言葉であります。人生において友人というものは殊に大切なものであります。学ぶこと、遊ぶことと両面において友人に啓発され、刺激されて、人間は成長していくものがあります。世俗的な利害関係のない学生同士の自由な付き合いの中で、或

は良友、或は悪友と呼び合う真の友人をもつよう、将来において思い出やエピソードが懐かしく語りあえる友を、心の支えになる友をもつよう、自らの心を開き、自ら進んで交際してほしいものです。

第三は、書物に親しむということであります。マスメディアによる情報や知識の提供が素早く大量に行われる中で、今日、大学生の読書量が大変減少しています。書物を読むという行為は単に知識をつけるだけではなく、思考力を養うことに役立つものであります。書物を読むと必ずわからぬところ、疑問をもつところがでてきたり、刺激を受けたりするものです。自分の頭でものを考える力は、そういう読書と思考の反復で養われるものであります。本学が誇りにしている図書館は、諸君の利用を待っております。

以上の三点は、大学生生活の基本に当るものです。人間社会（生活）の各分野各段階において、したら良いという事柄は案外単純でわかり切った事が多いと思います。問題はわかり切った事を素直に実行できるかどうか、実行しようと努力するかどうかにかかっているのです。わが大学の生活で、諸君は自分に甘えず、消極的にならずに、自由にいろいろな活動をして自分を鍛錬して下さい。何でもよい、一つでも手ごたえのあるものを掴んで、「自分はやったぞ」という充実感を体得してほしいものです。諸君一人一人が心を起し、身を起して、活氣溢れる大学生活をおくり、有意義な人生の基礎をうちたてられる事を心から祈念して、お祝いと激励のことばと致します。

昭和五十七年四月一日

松山商科大学長

稲生 晴]⁵⁾

5) 松山大学総務課。

この式辞において、稲生学長は大学生生活について語ったが、校訓「三実主義」についての言及はなかった。

5月29日、稲生学長ら大学側は教職員とその家族のために第1回ファミリー・フェスティバルを御幸グラウンドで開催した⁶⁾。家族、子供がたくさん集まり、運動会を行い、模擬店も出た。稲生学長・理事長の「学園協同体」論の具現化であり、「松山商大伝統の家族主義」（神森先生の言葉）の復興であった。

9月24日、渡部孝人文学部長の任期満了に伴う学部長選挙が行なわれ、渡部孝教授が再選された⁷⁾。

9月25日、大学院入試（修士課程）の9月期入試が行なわれ、経済学研究科は志願者4名、受験者3名、合格者3名であった。経営学研究科は志願者・受験者6名、合格者1名であった⁸⁾。

11月5日、来年が本学創立60周年にあたるので、稲生学長・理事長ら大学側は第1回の委員会を開いた。委員は、稲生学長、岩国理事、中川理事、望月理事、高橋経済学部長、高沢経営学部長、渡部人文学部長、梶原短期大学部長、田辺図書館長、山口経済経営研究所長、竹田事務局長、中本財務部長、武市学生部長、菅原総務部長であった。会議で次の5つの事業を計画し、実行することにした。

1. 記念式典（11月5日）
2. 教育研究充実基金の募金（1億円を目標とする。温山会5,000万円、大学関係5,000万円）
3. 大学の構想、計画について（校名変更、施設計画、学部編制など将来構想）
4. 学術、研究調査（60周年記念論文、地域調査）

6) 『松山大学九十年の略史』56頁。

7) 『学内報』第70号、1982年10月1日。

8) 『学内報』第70号、1982年10月1日。

5. 年史編纂（年表整理，史料・写真収集，60年史の編纂）⁹⁾

11月14日，前入試委員会で検討されていた推薦入学試験がはじめて実施された。選考方法は一般公募ではなく，西日本で初めての指定校制度を採用した。指定校制度は1高校から1人を高校長が推薦し，学部で審査を行なうというものであった。被推薦者の資格は昭和58年3月卒業見込みのもの，評定平均値が経済・経営が1～3年1学期末まで3.5以上，人文学部は3.7以上（英語英米は英語が4.0以上），そして，クラブ活動などで培った魅力ある人格の持ち主で，バイタリティ，指導性を発揮できるものであった。審査は経済学部は作文（経営は小論文，人文はなし）と面接であった。推薦入学の定員は経済学部約90名，経営学部約100名，人文学部英語英米約20名，社会約30名であった。推薦入試の志願数，合格者数は次の通りである¹⁰⁾

	募集定員	志願者数	合格者数
経済学部	約90名	100名	99名
経営学部	約100名	96名	94名
人文(英)	約20名	23名	23名
人文(社会)	約30名	40名	40名

本年度も，学生の自主的研究活動の発表の場である，第22回中四ゼミ（12月11，12日，香川大学），第29回全日ゼミ（12月20，21日，関東学院大学），第15回学内ゼミが開かれている。その詳細は不明である¹¹⁾

9) 『学内報』第72号，1982年12月1日。『学園報』第57号，1982年12月10日。

10) 『学内報』第65号，1982年5月1日。『学園報』第56号，1982年8月1日。『学園報』第57号，1982年12月10日。『学内報』第72号，1982年12月1日。『六十年史(資料編)』174頁。

11) 松山商科大学経済学部清野ゼミナール『AD2001』創刊号，1983年3月。清野ゼミは毎年中国政経ゼミナール大会と全日ゼミ（インゼミ）に参加し，発表している。

1982年12月末で稲生晴学長の3年の任期が終了するので、松山商科大学学長選考規程にもとづき、学長候補者推薦委員の選挙が行なわれ、10月14日、教育職員では、経済学部から高橋久弥、田辺勝也、比嘉清松、山口卓志、経営学部から岩国守男、越智俊夫、高沢貞三、中川公一郎、人文学部から星野陽、渡部孝が選出された。事務職員は10月16日に選挙。そして、11月6日の推薦委員会で稲生教授一人が推薦され、11月17日に稲生教授の信任投票となり、稲生教授が過半数をえて再選された¹²⁾

12月10日、稲生晴学長は『学園報』第57号に「大学の個性強化をめざして」と題し、再任の挨拶を載せ、今日の大学生の現状を憂い、その原因を究明し、対策をたて、実行していかなければならないとし、教育方法の改善、大学の目的、独自性の明確化、三実主義の具現化などを述べた。

稲生学長は校訓「三実主義」については、これまでみてきたように、特に式辞では言及しなかったが（理由は不明であるが、稲生先生の思想・信条から古いとして重要視しなかったものと推測される）、今回、再任に際し、はじめて言及した。大きな変化である。稲生学長は「本学の特殊を表現する指針として、『三実主義』があります。真実、実用、忠実を旨とするこの基本精神を現実の歴史的諸条件のもとで、いかに実践的な大学運営の綱領に具現するかがわれわれの課題であります」¹³⁾と述べた。

この稲生学長の「三実主義」の順序は、1957年4月の星野通学長の順序（真実、忠実、実用）と異なる。また1962年4月以降の『学生便覧』の順序とも異なる。稲生学長時代の『学生便覧』とも異なり、稲生学長による順序の変更であった。そして、その順序は実は田中忠夫校長が1941年4月の始業式で述べた順序の再現・復活である。

なぜ、稲生学長が田中忠夫の順序に変更し、忠実よりも実用を先に回したの

12) 『学内報』第71号、1982年11月1日。『学内報』第72号、1982年12月1日。『学園報』第57号、1982年12月10日。

13) 稲生晴「大学の個性強化をめざして」『学園報』第57号、1982年12月10日。

か、その説明はなく不明である。

ここからは、私の私見であるが、来年が創立60周年にあたるので、稲生先生は改めて、田中忠夫編の『三十年史』を読み直し、本学の歴史を勉強し、田中校長の功績（学園の拡張政策）を評価する中で、田中忠夫の「三実主義」の順序に引きつけられたものと思う。

そして、その順序はまた、稲生学長が再任にあたり、大学の「個性化」を打ち出し、そのために「実用」を忠実よりも前に回し、重視せんとする思想の反映ではないかと思う。

1983年1月1日、稲生学長は『学内報』第73号に「年頭のことば」を載せ、本年の大学運営の課題として、第1に初めて推薦入学生を受け入れて、如何に学生生活の活性化を実現するのか、第2に創立60周年事業の推進、第3に新学部新学科の増設や新校地の開発、施設整備の基本方針の決定をあげた¹⁴⁾

2月9日～11日、1983年度の入試（一般入試）が行なわれた。経済学部が2月9日、経営学部が2月10日、人文学部が2月11日であった。試験場は本学、京都、岡山、広島、福岡、高松の6会場で行なわれた（東京は廃止）。募集人員は経済・経営両学部とも350名、人文学部は英語英米文学科が80名、社会学科が100名であった（推薦を含む）。一般入試の志願者は経済が2,671名（前年2,919名）、経営が2,670名（前年2,807名）、人文英語が453名（前年495名）、社会が832名（848名）、合計6,626名（前年7,069名）であった。一般入試の志願者が減少したのは、推薦入試の導入のためであった。検定料は1万9,000円、合格発表は2月18日で、経済学部が922名、経営学部が929名、人文学部英語英米文学科が222名、社会学科が299名を発表した。しかし、その後、経済学部と人文英語が補欠合格者を出し、経済学部が964名、人文学部英語英米文学科が250名を発表した。なお、学費は入学金は13万円（前年度と同じ）、授業料は28万円（前年度27万円）、施設拡充費は6万円（前年度

14) 稲生晴「年頭のことば」『学内報』第73号、1983年1月1日。

5万円)、その他が2万9,850円で、合計49万9,850円で、2万円の値上げであった¹⁵⁾

2月15日、高橋久弥経済学部長の任期満了に伴う経済学部長選挙が行なわれ、田辺勝也教授(51歳)が選出された¹⁶⁾

3月1日、稲生学長は、卒業生に対し、『学園報』第58号にはなむけのこたばを載せ、今日の経済の深刻な状況－世界同時不況、失業の増大、財政赤字等－を指摘し、経済難を軍備拡大で乗り切ろうとするのは危険な選択だと警鐘をならし、平和の道で経済の安定と繁栄の方向にこそ我々の明るい出口がある、今後いろいろな試練があるが、何事にも屈せず、耐え抜いて逞しく生きることを祈う、と述べている¹⁷⁾

3月19日午前10時より本学体育館にて第32回卒業式が挙行された。経済学部354名、経営学部389名、人文学部英語96名、同社会171名が卒業した。大学院経済学研究科は修士課程3名、経営学研究科は修士課程5名が修了した¹⁸⁾

稲生学長の卒業式の式辞は次の通りで、現代の世界同時不況、経済の行き詰まりを述べ、軍備増強の道でなく、平和経済の道に進まなければならぬ、と説き、安倍能成先生の「低履高思」(質素な生活と高邁な思考)やワーズ・ワースの言葉をはなむけに送る、学識高いものであった。

「本日茲に多数の御来賓の御臨席を賜り、昭和五十七年度学位記・卒業証書授与式を挙行致しますことは、本学のもっとも慶びとするところであります。

15) 『学内報』第73号, 1983年1月1日。『学内報』第75号, 1983年3月1日。『学園報』第56号, 1982年12月10日。同57号, 1982年12月10日, 同58号, 1983年3月1日。同59号, 1983年4月1日。『六十年史(資料編)』174頁。

16) 『学内報』第75号, 1983年3月1日。『学園報』第58号, 1983年3月1日。

17) 『学園報』第58号, 1983年3月1日。

18) 『学内報』第76号, 1983年4月1日。なお、『60年史(資料編)』141頁では9月卒業を含み、経済学部359名、経営学部391名、人文学部英語96名、社会171名が卒業した。

御多忙のところ、態々御臨席戴きました御来賓各位に対しまして厚く御礼申し上げます、卒業生並びに御家族の方々に対しまして心からお祝いを申し上げます。

言うまでもなく卒業生は大学のもっとも重要な成果であり、大学の社会的評価を左右する基本的な要素であります。ここに創立六十周年の意義深い年を迎えて、諸君を世に出し、わが大学の樹勢を益々強めることを期待して止まない次第であります。

扱て、卒業生諸君の栄ある門出を祝福し、前途の御多幸を祈願して激励のことばをおくりたいと思います。

今、最後の学校生活を終わる諸君の胸中には複雑な感慨が去来していることと思います。静かに考えてみて下さい。諸君は二十数年間の長きにわたって家庭の庇護と社会の恩恵を受けて育てられ、人間としての能力の形成の為に、社会的富とサービスを一方的に消費し、社会的労働、労役を免除されてきました。これから初めて日本の就業人口の数に入り、実社会の働らく一員となるのであります。この生活の大きな変化に覚悟を新たにしてい積極的に対決し、勇敢に第一歩を踏み出すことを期待します。

諸君を新人として迎える社会、諸君が跳び込んで行かねばならぬ社会環境は、大変厳しい情勢であります。諸君が本学で既に学ばれたように、あらゆる人間社会の土台は経済であります。その経済は高度成長時代に終りを告げて低成長時代に入り、今日の経済は「世界同時不況」の真只中におかれているのであります。失業者の増大、貿易の縮小、国家財政の悪化、国際間の不均衡と摩擦、国際的な信用不安等によってなされている通り、内外の経済は深刻な事態を生じているのであります。私は一九三〇年代の大破局が再び同様の形で起きるとは思いませんが、それでは、いつ、どのように雇用と物価の安定した成長経済になるのか、予断、予測を許さない時代であると思います。経済を支える企業や働く者が、これから多くの苦難に対応しなければならぬ事だけは確実でありましょう。われわれのくら

しが冬の時代に入っていることを冷厳に認識し、この原点から新しい安定社会に向う前途を探求し、選択しなければなりません。私は今、彼の大恐慌と長期停滞の時代が第二次世界大戦へと進行していった道筋を回顧せずにはられません。結論的に申しますならば、今日の国際的環境と経済の行き詰まりの時期において、私は軍備の増強の道を歩むことは殊に重大且つ危険な選択であることを確信するものであります。われわれは何としても、経済戦争が戦争経済に転移することを避けて、平和経済の方途を守り平和の中で経済の安定と繁栄を実現する方向を選択すべきでありましょう。そこに苦難のトンネルの出口を見出したいものであります。

大きな社会の動き、流れと同時に、否、それとの密接な関係において、諸君はそれぞれ個々に自分自身の生活を確立しなければなりません。約三十年前、安倍能成先生が本学の為に揮毫された「低履高思」という額があります。これは十九世紀初期のイギリスが生んだ高名な詩人、ワーズワースの「プレインリビング、アンド、ハイシンキング」という言葉を漢訳されたものであります。辞書の和訳によれば「質素な生活と高邁な思考」と訳されていますが、変革と激動の産業革命の真只中で、市民個人の日常的な生き方、あり方を求めたこの詩人の言葉は、今日の我々の日々の生活においても適切な人生の心構えを教示するものであります。諸君は、本学の指針、真実、実用、忠実の、いわゆる三実主義とともにこの「低履高思」の精神を胸に刻んで、堅実に逞しく生きぬくことを望むものであります。

終りにあたり、衷心より諸君の御多幸を祈り、諸君が常に希望と勇氣を失うことなく、何ものにも屈従せず、何ごとにも耐えぬいて立派な自己史を築きあげることが切望してはなむけの言葉と致します。

昭和五十八年三月十九日

松山商科大学学長

稲生 晴]¹⁹⁾

この式辞の中で、稲生学長は校訓「三実主義」の順序を「再任の挨拶」と同じく、「真実・実用・忠実」と述べているが、さきにも述べた如く、星野通学長の順序、毎年の『学生便覧』の順序と異なっているのに、何の説明することなく変更しており、稲生学長の勇み足であると思う。

3月22日、大学院経済学研究科（修士・博士）、経営学研究科（修士）の入試（第2次）が行なわれ、経済は修士課程3名が受験し、2名（一人女性）が合格した。博士課程は1名が受験し、合格した。経営は修士課程5名が受験し、1名が合格した²⁰⁾

3月31日、経済学部の松野五郎（統計学）が退職した（4月より再雇用）。また高村晋（法学、行政法）らが退職した²¹⁾

（以下、次号）

19) 松山大学総務課所蔵資料。

20) 『学内報』第76号、1983年4月。『六十年史（資料編）』161頁。

21) 同。